

ゴリラ 45 分 500 円

青嶺

「イケメン見に行こう！」

マミの言うことはいつも唐突だ。今も、帰りのホームルームが終わった瞬間に千秋の背中に飛びついてきた彼女は、大きな目をきらきら輝かせて何の脈絡もない誘いをかけた。

「は？ どこに？」

千秋が困惑しながら尋ねると、マミは満面の笑みを浮かべて「動物園！」と答えた。

読めた。誘いの理由ではなく、彼女が見たがるイケメンの正体が。

かくして二人は閉園間際の動物園にいた。

「あっ、いた！ あそこ！」

千秋の読みに狂いはなく、やはりマミが指さした先にいたのは、群れの中で一番大きなゴリラであった。

ニシローランドゴリラ。千秋は柵の前にあるプレートの文字にちらりと視線を投げてから、マミの目当てのゴリラに目をこらした。確かにそれっぽいが、距離が遠く、意外と顔がはっきりと見えない。

「うーん、イケメンだわ、噂に違わず」

マミが感心したようにうなる。千秋はゴリラの顔を精査するのをあきらめ、マミはよくあんな遠くのものが見えるな、と彼女の視力に驚いていた。

「ホントに、シャバーニのほうが、松木駿介なんかよりずっとカッコいいわ！」

いきなり大声を出したマミに、千秋は驚いて彼女を見る。マミは笑っていたけれど、千秋には彼女が今にも泣きだしそうに見えた。

ひとしきりゴリラの凛々しい顔立ちや甲斐性についてべた褒めしてから、マミは柵に体を預けたまま、あのね、と小さな声で話し始めた。

「別れたの、駿介と。今日の昼休み」

松木駿介は千秋やマミの隣のクラスの男子で、この春からマミと付き合っていた。童顔の優男系で、間違ってもゴリラと並列されることはなさそうなタイプだった。

「『マミにはついていけなくてキツイ』って」

ゴリラを凝視しながら、マミは彼の口真似を入れた。たぶんあまり似ていない。それでも、なるほど、と千秋は思った。きっと彼は、彼女の唐突な言動を理解できなかったのだろう、と。そして、彼は彼女を理解できないことが許せなかったのだろう。

「ねえ、千秋も私についてこられない？ 私といると、キツイ？」

不意に千秋にそう尋ねて、マミは足元に視線を落とした。千秋の答えを待つ彼女の口元は緊張したように引き結ばれている。千秋はどんな言葉が正解なのかわからず、しばらくの間、

黙ってゴリラの毛づくろいを眺めていた。そして、迷いつつ口を開く。

「私もね、マミについていけないよ」

びくりと肩を震わせてからのろのろと千秋を見上げたマミの瞳から涙がこぼれる前に、あわてて「でも、」と言葉を継ぐ。

「私はマミと一緒にいると楽しい。全然キツくなんかない」

マミはぼかんとした顔で千秋を見詰め、なんで、と声にならない声で問うた。

「私がついていけなくても、マミは引っ張っていつてくれるんでしょ？」

千秋は、一言ひとことを丁寧に発した。きちんとマミに伝わるように、彼女が千秋の言葉を取りこぼさないように。

「私はマミに引っ張り回されるの、好きだよ」

正解だっただろうか。千秋の思いは伝わっただろうか。千秋は緊張の面持ちでマミを見詰めた。

そっかあ、とマミは嬉しそうに笑った。目を細めた拍子に、涙が一筋、彼女の頬を伝った。

「ごめんね、千秋。こんな短時間だけゴリラ見るのに五百円も使わせちゃって」

いいってことよ、と芝居めいたセリフと一緒に千秋は済まなさそうに眉を八の字にするマミの肩を叩いた。

結局二人は、入園してから閉園までの四十五分間を、ずっとゴリラの前で過ごした。五百円の入場券で動物園に一日いられることを考えれば、この四十五分は確かに割高ではあったけれど、構わない。それでマミが元気になるのなら、安いものだ。

千秋は笑った。こんどはマミはどんなところへ千秋を連れていつてくれるのだろう、と胸を躍らせながら。